

2011 年度 中央大学特定課題研究費 一研究報告書一

所属	商学部	身分	教授
氏名	遠山 暁		
NAME	Tohyama Akira		

1. 研究課題

(和文) 情報システム化実践における研究・構築方法論の研究

(英文) Perspective and Methodology in Information Systems Research and Practice

2. 研究期間

2年間

3. 研究の概要 (背景・目的・研究計画・内容および成果 和文 600 字程度、英文 50word 程度)

(和文)

2000 年代に入ると情報システム論の “Identity Crisis” が叫ばれ、百家争鳴である。そこで 2 年計画で、1960 年代後半から現在に至る情報システム化実践における研究方法論・構築方法論の発展に影響を与えた代表的な先行研究をサーベイすることにより情報システム論が一つの応用的ディスプリンとして存在意義をもち続けることができるか、そしてその発展が期待されるかどうかを明らかにして、その検証を試みる。

結論的には、論理実証主義的パースペクティブから、個人、グループ、そして組織における IT 人工物の適用に焦点を置いて、他のディスプリンとの境界を明確にして理論的コアを確立しようとする現在主流の研究には限界があることを明らかにする。むしろ社会構成主義的パースペクティブから、IT 人工物そのものが社会的構築物であり、情報システムは、IT 人工物が一局面にしか過ぎない社会システムであるという認識に立つことによって応用的ディスプリンとして存在し、発展する可能性があることを明らかにする。そして情報化実践における構築方法論としては、以上の認識のもとに、情報システムのライフサイクルである開発と利用プロセスが概念的にも実体的に区別できない連続的事象であるという認識のもとに構築方法論を見直し、再構築することが最大の留意点になることを検証する。ただし、2 年目に計画していたフィールド研究による検証は途中である。

(英文) In order to re-establish IS as an academic applied discipline, I conclude that the following notions play a key role. First, it is reasonable to argue that IT artifacts can be construct as social constructions and IS are essentially social systems of which IT is but one aspect. Second, the discipline should be adapted a trans-disciplinary rather than disciplinary approach. Third, it is reasonable to treat them as mutually constitutive in nature because the activities surrounding development and use of IS often overlap and influence each other.

4. おもな発表論文等（予定を含む）

<p>【学術論文】（著者名、論文題目、誌名、査読の有無、巻号、頁、発行年月）</p>
<p>遠山 暁 「情報システムの厳格性と目的関連性を巡る論争の意義」（仮題） 日本情報経営学会誌 Vol.33. No.4 2013,7 予定</p>
<p>【学会発表】（発表者名、発表題目、学会名、開催地、開催年月）</p>
<p>【図 書】（著者名、出版社名、書名、刊行年）</p>
<p>遠山 暁 中央経済社、「現代情報システム研究の基礎理論」2014年4月の予定</p>
<p>【その他】（知的財産権、ニュースリリース等）</p>